

情報サービス産業が社会を変える存在に!

情報サービス産業協会 企画・広報委員会 バラスポ支援プロジェクト

JISA革命プロジェクトとして活動してきた「パラスポーツ支援コミュニティ」が5年間の活動を総括しました。
(パラスポ支援プロジェクト事務局)

はじめに

今から5年前、2016年にJISA革命プロジェクトとして立ち上がった『パラリンピック支援プロジェクト』。その後、名称を『パラスポーツ支援コミュニティ (JPSSC)』(以降JPSSC) に変えて活動を続け、2021年9月の『2020東京パラリンピック』閉会をもって活動を終えました。

“ソフトウェアで「! (革命)」を”
一人ひとりに お客様に 私たちに
「! (おどろき)」を
「! (きらめき)」を
「! (ワクワク)」を

これは、2015年に発表された「JISA Spirit」です。このSpiritが目指すことは、情報サービス産業全体が「受託産業」から「価値創造産業」へと大きく変わることです。そして、このSpiritを具現化するために二つの「JISA革命プロジェクト」が立ち上がりました。情報サービス産業が社会を変えるドライバーになるべく、第一歩を踏み出したい。そんな思いが込められた二つのプロジェクトです。

その一つが『中学校教育のデジタル化』です。ICT教育で先進的な取り組みを行っている鳥取県の青翔開智中学・高等学校と連携し、ICTの力を利用して学習効果を高めるための調査・研究を行うプロジェクトです。

そして、二つ目が今回のテーマである『パラリンピック支援プロジェクト』です。

そもそも、何故、情報サービス産業協会がパラリンピックやパラスポーツを支援するのか。何故、JISA革命プロジェクトでパラリンピック支援なのか。疑問に思われる会員が多いと思います。

正副会長会社や理事会社から5人のメンバーがプロジェクト立ち上げチームに選任され、約半年掛けて目的の核心を追求し、JISAとして何が出来るか、何をすべきかについて議論を重ねましたが、立ち上げメンバーの中でさえも目的意識の高さに隔たりがあったことは事実です。

その後、立ち上げメンバーの中から3人が本プロジェクトの主旨に深く賛同し、同じ問題意識を持った新たなメンバーを加え、2017年からJPSSCとして活動を開始したのです。この活動に対する思いについては、2017年3月の理事会でお伝えし、出席頂いていた理事の皆様からご賛同頂きました。

何故、パラスポーツ支援だったのか

今でこそ、DXは全ての企業、及び国としても最重要課題になっており、それに向けたICTの役割も大きく変わっています。DXはお客様と企業、或いは市民と行政の関係を変え、サプライチェーンを変え、マーケットを変え、人々の価値観をも変えようとしています。つまり、DXはテクノロジーを活用した社会変革であり産業革命なのです。これまで、既存ビジネスの効率化や高度化に寄与してきたITやSIは、その役割を縮小し、新たな価値創造や社会課題の解決に役割を移していくのです。

近い将来、情報サービス業も変革を迫られることを5年前に認識しました。SEやSI企業がビジネスの裏方を支える専門家集団のままであっては日本のDXは進まない。依頼されたものを、依頼された通りに開発して納めるビジネスモデルはやがて成り立たなくなる。そう認識したのです。情報サービス業に携わるエンジニア、つまりJISAの会員が、受け身の専門家集団から脱却し、社会を変えるドライバーになることが求められるのです。そのためには、意識改革が必要です。自らが積極的に社会課題に関与し、共感し、変えていこうと行動する。そのようなマインドをJISA会員内に広く醸成すべく、テーマに選んだ社会課題がパラリンピックでした。

2012年に開催されたロンドンパラリンピックが史上最高のパラリンピックと言われています。パラリンピックの競技会場が観客で埋まり、オリンピックと同じように盛り上がりました。バリアフリーなど街中の環境が整備され、障がい者に対する国民の理解も高まり、まさにレガシーとしてD&Iが定着したのです。4年後の2016年リオ大会も多くの観客が競技会場に集まりました。環境面の整備は先進国並みにはなりませんが、人々の心のD&Iは進んでいました。

果たして、日本でパラリンピックが開催出来るのか。世界中から疑念の声が出ていたと聞いています。パラスポーツの認知度の低さ、障がい者に対するD&Iの意識が、日本は先進国の中で圧倒的に低いのです。このまま2020年を迎えたら、関係者しかいない会場でパラリンピック競技が行われることになり、世界中から冷ややかな目で見られることになりかねない。これは国を挙げて取り組むべき社会課題なのです。

JPSSCを立ち上げる準備期間中に、超党派の国会議員が集まる「パラリンピック成功WG会議」をオプザークしました。自民党・野田聖子さんが座長になって、国会議員や、霞が関の省庁、東京都、メディア、パラリンピアンズ協会、大会組織委員会などが出席する大規模な会議です。パラスポーツのプロモーション

や、環境整備、大会準備に関する状況が各責任組織から報告され、共有されました。まさに、国を挙げて、何としても日本で開催されるパラリンピックを盛り上げようとしているのです。

そこで、ICTに強い情報サービス産業界が、その強みを活かして、この社会課題解決に貢献したい。それこそが、情報サービス産業に携わる人たちのマインドを変えることにつながる。まさに、JISAの革命です。情報サービス産業が社会やビジネスを変えるドライバーになるべく、積極的に社会課題の解決に関与する姿勢を示す。それがJISA革命プロジェクトとして「パラリンピック支援」を掲げた理由です。

壁は高く、厚かった

パラリンピックの全ての競技会場を満員にすることが国の目標でした。そのためには、パラスポーツの認知度を高める必要がある。そこで、それをミッションとする2つの組織にコンタクトしました。一つは、日本障がい者スポーツ協会です。JISAの思いをお伝えしたところ、大いに賛同頂きました。東京パラリンピックを成功させることは同協会にとっても重要課題であり、応援してもらえることは大いに歓迎ということです。

もう一つは、日本財団のパラリンピックサポートセンター*（以降、パラサポ）です。パラスポーツ競技はオリンピック競技と比較してスポンサーも少なく、競技団体の運営が厳しい中、それをサポートすべく2020東京大会の競技を対象に共同オフィスを提供し、助成金管理等の事務処理を代行しているのです。人気アイドルグループを公式サポーターにして、大々的なイベントを展開するなど、プロモーションにも大きな力を入れていました。JPSSCとしても先方の事務局と頻度高く連携し、以降、イベントへの参加や、パラスポーツ体験会の開催など、可能な限りのコラボレーションをしてきました。

*2022年1月1日付けで「日本財団パラリンピックサポートセンター」に改称

同じ志を持つ、これらの団体との連携は有意義だと認識しましたが、一方で2つの大きな壁にぶつかりました。一つは、知財に関する課題です。「パラリンピック」や「2020東京」など、東京オリンピック・パラリンピックに関する言葉が知的財産として保護されており使用出来ないということです。パラリンピックを応援する活動を展開するにあたって、「パラリンピック」や「TOKYO」という言葉を使ってプロモーションすることが出来ない事は致命的でした。そこで、やむを得ず、パラリンピックという言葉を使わずに、パラスポーツのプロモーションを支援するコミュニティとしてスタートすることにしました。

二つ目の壁はビジネスとの折り合いの壁です。JISAの強み、コアコンピタンスはICTです。なので、ICTを活用した支援活動が出来ないか検討しました。パラスポーツ協議団体の団体運営をICTでサポート出来ないか。或いは、パラリンピックを観戦に来られる障がい者をサポートするアプリを提供できないか、等々。アイディアは広がりましたが、いくつかの壁に阻まれました。一つはJISA会員企業のビジネスとの折り合いです。活用出来そうなソリューションを持っている会員企業があることは認識していましたが、特定会員企業のビジネスに寄与する活動は出来ない。それが結論でした。情報サービス産業協会として、会員企業の中に社会課題を解決出来そうなソリューションがあるのに、それを活用できないもどかしさを感じました。



2017年6月21日 キックオフミーティング開催

また、公式スポンサーの壁もありました。JPSSCの最初の活動として、コミュニティWebサイトの立ち上げとアイデアソンの開催を計画し、サーバー利用で協力頂けるクラウドベンダーを探すべく、いくつかの企業に協力をお願いしました。しかしながら、何れの企業もサーバー分野の公式スポンサーではないという理由で断られました。オリンピック・パラリンピックは世界最大のスポーツの祭典であると同時に、ビッグビジネスの場でもあることを思い知らされました。

それであれば、クラウドやサーバー分野で公式スポンサーになっている企業に協力を依頼すればよい。そう考えて、その可能性が高いベンダーに相談に行きましたが、相手にして頂けませんでした。体よく断れましたが、要するに、マネタイズできなければ社内を動かせないという事だと理解しました。業界の力で社会課題を解決したいという熱い思いを持って活動を始めたのですが、思いだけでは世の中は動かないという現実を突き付けられたのです。

それでも、思いがないところには未来はないと信じて、JISA会員内でパラスポーツファンを増やすという地道な目標に切り替えて本格的な活動を開始しました。そして、活動開始に当たっては嬉しいこともありました。JISA会員企業ではありませんが、アマゾン・ウェブ・サービス・ジャパン社にJPSSCの志に賛同頂き、アイデアソンに協賛頂くと共に、期間限定ではありますがクラウド環境を無償でお貸し頂くことになりました。ビジネス関係や柵に捉われることなく、「そ



2017年7月21日 アイデアソン開催

れは良い」と思ったらすぐに決断して、実現に向けて動き出す。この決断力とスピード感が日本の情報サービス産業界にも求められるのだと感じました。

延べ600人以上の会員に思いを届けた活動

JISA会員内にパラスポーツのファンを増やすという目標を掲げてJPSSCは5年半に亘り活動を続けて来ました。思い返してみると、多くの方にご協力頂きながら、様々なイベント、セミナーを開催してきました。そして、それらのイベントやセミナーに参加頂いたJISA会員は延べ600人を超えます。パラリンピッ

ク開催までに2,000人にすることを目標にしていたが、それが実現出来なかったことは残念です。

600人と言うのは、JISA会員の数からみると僅かな人数ですが、パラスポーツを通してD&Iという社会課題に向き合う必要があることを認識した会員が増えたことには意味があったと思います。そして、この総括レポートをお読みいただくことによって、更にその数が増えることを願っています。

各イベントやセミナーの実施レポートについては、これまで数回にわたって会報誌で紹介してきましたので、ここでは、この5年間の活動内容をまとめて列挙します。

実施日	活動内容@開催場所	参加者数
2017年6月21日	JPSSCキックオフミーティング&ワークショップ	50
2017年7月21日	アイデアソン開催with AWS社	50
2017年秋	JPSSCのWebサイト公開	Web
2017年10月24日	ゴールボール浦田理恵さん講演@JDMF2017	30
2018年2月26日	多摩障がい者スポーツセンター見学 車いすバスケットボール体験	6
2018年4月	パラトライアスロン秦由加子さん特別インタビュー	Web
2018年9月26日 10月26日	ボランティアセミナー開催with STAND様	130
2018年11月13日	特別セミナー&体験会開催with 日本財団パラアリーナ	36
2019年7月2日	関西地区会でのJPSSCセミナー 車いす陸上小西恵子さん講演	30
2019年10月29日	JDMF2019でのセミナープロデュース ・田中ウルヴェ京さんと浦田理恵さんの対談 ・義足ダンサー大前光市さん講演&パフォーマンス ・ボッチャ秋元妙美さん講演	300
2020年2月17日	東京地区会でのJPSSCセミナー 視覚障がい者柔道初瀬勇輔さん講演	30
2017年～2019年	パラスポーツ観戦&応援 【観戦したスポーツ】 ゴールボール、車いすバスケットボール、パラトライアスロン、 ウィルチェアラグビー、パラバドミントン、ボッチャ、パラ陸上	20
2020年8月19日	オンラインショートインタビュー 車いす陸上の小西恵子さん	5
2021年1月28日	オンライン座談会with STAND様 STAND伊藤様をお迎えしてオンライン座談会	5
2020年～	「Irodoru」での情報発信	Web

5年間の活動に協力頂いた皆さん

JPSSCの立ち上げ当初から、外部の様々な企業、組織の皆さんにご協力頂き、多くの事を学ばせて頂きました。日常業務やJISAのこれまでの活動の中では接点がなかった皆さんと共に活動することにより、JPSSC事務局メンバーだけでなく情報サービス産業界としても視野を広げ、視点を変えるきっかけになったと思います。ご協力いただいた全ての組織、人、パラアスリートに感謝していますが、特に、JPSSCの活動に深く共感頂き、JPSSCの活動を支えて頂いた3つの組織について、この総括の中で感謝の意を書き記しておきたいと思います。また、パラリンピックに向けて日々トレーニングや競技を続ける中で、時間を割いてJPSSCの活動に協力頂いたパラアスリートについても、同様に、この総括の中で感謝の意を書き記しておきます。そして、今後も応援し続けることを約束します。

特定非営利活動法人 STAND様

STANDには2018年に開催したボランティアセミナーで大変お世話になりました。STANDは「ユニバーサルコミュニケーション」をテーマに活動されているNPOで、その一環としてパラスポーツのプロモーション活動もされています。

NPOの代表であり、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の顧問もされている伊藤数子様をご紹介頂き、JPSSCの活動についてお伝えしました。そして、協働できることがあったら是非、一緒に活動させて欲しいとお願いしたところ、二つ返事で快諾頂いたのです。全く畑の違うICTの業界団体がやってきて、パラスポーツをプロモーションしたいという話を、その場で受け止めて頂き、多くのことを教えて頂きました。そして、STANDが展開していたボランティアセミナーをJPSSC向けにアレンジ頂き、2018年に2回開催し、合計130名の会員が参加しました。参加者の中には、その後、大会ボランティアにエントリーした人も複数いました。

また、代表の伊藤様においては、翌2019年に実施

した地区会でのパラスポーツ講演においても講師をお願いし、更には、2021年に開催したオンライン座談会にも協力頂きました。

このJPSSCの活動は、STAND、及び伊藤様の協力なしには進められなかったと思います。心から感謝すると共に、JPSSCの活動が終了した後も、個人的に同NPOの活動に協力させて頂きたいと思っています。



ボランティアセミナーでご講演頂いた伊藤様

日本財団パラリンピックサポートセンター様

日本財団のパラサポとは色々な分野で連携させて頂きました。数多くあるパラスポーツの中で2020東京大会のパラリンピック競技になっているものは22競技。大きな組織で運営する競技団体もありますが、オリンピック競技と比較すると極めて小さく個人レベルで運営されている競技団体もあります。そんな競技団体を支援し、パラリンピック競技を広くプロモーションしているのがパラサポです。

財団という事からも、多額の費用を拠出し、JPSSCでは決して真似できない程の大々的なプロモーションを展開しています。パラサポ事務局の金子様とは事あるごとに連携させて頂き、JPSSCの活動をご支援頂きました。特に2018年に開催したJPSSC特別イベントにおいては、同センターのセミナーをJPSSC用アレンジ頂き、パラサポが建設した日本財団パラアリーナでのパラスポーツ体験会も同時に開催頂きました。パラスポーツを実際に体験することによって、パラアスリートの凄さを知り、応援しようという気持ちが高まりました。そのような場を提

供頂いたパラサポと金子様に心から感謝しています。パラリンピックを盛り上げたいと言う共通の目的を持った仲間だと思っています。



パラアリーナでのパラスポーツ体験

障害者スポーツ選手雇用センターC's Athlete (シーズアスリート) 様

「障害者スポーツ選手雇用センターC's Athlete (シーズアスリート)」は、福岡にあり、仕事と競技の両立を実現する組織です。シーズアスリートとの出会いは、2017年のJDMFでゴールボールの浦田理恵さんにご登壇頂いたことでした。シーズアスリートには現在（2022年1月）、9名のパラアスリートが所属し（1名は特別サポート選手）、仕事との両立を図りながらパラスポーツに取り組んでいます。そして、その仕事の一つが講演などを通じたプロモーション活動なのです。パラスポーツの魅力を伝えるためには、パラアスリート本人の話を聞くことが一番。とは言え、パラリンピアンやパラアスリートに講演頂くことは容易ではありません。全く知識や経験のないJPSSCの事務局に対し、シーズアスリートには手厚くサポートして頂きました。

5年間の活動を通じてシーズアスリートとの信頼関係は極めて深いものになりました。シーズアスリートはJISAと同様に会員の支援で活動が成り立っています。JISAとしてシーズアスリートの会員になることは出来ませんでしたが、JPSSC事務局のメンバーが個人会員になると共に、JPSSC事務局企業の一つが法人会員になりました。お互いが、相互の活動を支援する。まさにWin-Winの信頼関係が出来たと思います。

活動に協力いただいたパラアスリート達

JPSSCの5年間の活動を通じて、多くのパラアスリートと出会い、話を聞き、競技を観戦し、応援し、多くの事を学び、感じさせて頂きました。彼ら、彼女らから得た新しい価値観や感性は、どんなICTスキルよりも大きな財産になったと思います。ICTに関わる目の前の仕事をしているだけでは、絶対に得られないものでした。

パラアスリート達から得た最も大きな学びは、「普通」や「当たり前」とは何かということです。私たちは、これまでの業務経験の中で様々なバイアスを身に纏ってきました。また、効率化や生産性向上を目指して、仕事やプロセスを標準化し、俗人化を排除してきました。そして標準化と俗人化の排除は、同時に同質化を広げたと思います。誰もが同じように考え、自分たちだけの当たり前を作り、出来ることと出来ない事を暗黙知として培い、その常識の中で仕事をするようになっている気がします。

仮に、明日、自分の目が見えなくなったらどうするでしょうか。画面が見えて、字が読めて、相手の顔が見えることが当たり前だと思っているけど、これが覆されたらどうなるか。或いは、今日、事故に遭って下半身が動かなくなったどうなるか。仕事が続けられるだろうか。そもそも今まで通り暮らせるだろうか。今までの常識の中では何も想像出来ません。思考が停止してしまうと思います。でも、実際は、出来ることが沢山あるのです。今までの常識では出来ないと思っていたことが、発想を変え、努力を重ねることで出来るようになることがあるのです。パラアスリート達は、そうやって限界を超えて、トップアスリートの世界で生きているのです。

これは、トランスフォーメーション（X）の精神にも通じるところがあります。常識を超えて、限界だと思っていた壁を超えないとトランスフォーメーションは起こりません。「普通」や「あたりまえ」で縛られている思考をオープンにすることが重要なのです。そ

の事を、私達はパラアスリートから学ぶべきだと思います。

JDFMに2度ご登壇頂いた、ゴールボールの浦田理恵さん。目の病気で視力を失い、絶望の中で出会ったゴールボールに生きる道を見つけ、華奢な体を鍛えぬいて、ロンドンパラリンピックで金メダリストになりました。そして、自分が金メダルを取ることで周りの人たちを幸せに出来ることを知ったと言います。私たちも、2017年のJDMFで出会って以降、浦田さんを応援するようになり、関東で大会がある時は観戦に行きました。是非、多くの皆さんにゴールボールの試合を生で見たいです。本当に目が見えない人たちが戦っているのかと疑いたくなるくらい、自由に動き回っているように見えます。これは完全にトップアスリートのスポーツです。

2020東京パラリンピックが一年延期になり、ベテランである浦田さんの代表内定は一旦保留になりました。浦田さんが東京パラリンピックで再び金メダルを取る姿をこの目で見たい。その一心で応援を続けていましたが、一年延期になって、更に応援する気持ちが強くなりました。コロナ禍で全ての大会が無観客になったので、ライブでの応援が出来なくなりましたが、是非、代表内定を失わないで欲しいと心から願いました。

そして2021年4月30日、パラリンピックの日本代表があらためて発表され、浦田さんも選出されました。



JDMFでご講演頂いた浦田理恵さん

た。本当に嬉しいニュースでした。日本代表であると共に、勝手ながらJPSSC代表のパラリンピアンだと思っています。浦田さんの東京パラリンピックでの活躍については後述します。

浦田さん以外にも、JPSSCの活動に協力頂いたパラアスリートがいます。一人目は、パラトライアスロンの秦由加子さん。JISA会員企業であるキャノンマーケティングジャパンの社員であり、正真正銘、JISA会員のパラリンピアンです。リオ大会で6位に入賞し、東京ではメダルを目指しています。秦さんには2018年にお時間を頂き、インタビューさせて頂きました。片足を失われた経緯から、パラトライアスロンとの出会い、アスリートと仕事の両立、D&Iに対する思いなどを語って頂き、大変貴重なお話を記事に出来ました。JISAのアーカイブに残されていますので、是非、ご一読頂きたいと思います。

(<https://www.jisa.or.jp/activity/committee/tabid/2933/Default.aspx>)

そして、横浜で開催され、秦さんが出場したパラトライアスロンの国際大会を観戦し、目の前で応援出来ました。パラトライアスロンはトライアスロンの半分の距離で競われます。つまり、スイムが750m、バイク（自転車）が20Km、ランが5Kmです。障がいの種類や重度によってクラス分けがされますが、秦さんの場合は比較的重い障害のPTS2クラス。私たちの常識では考えられず、限界を超えているとしか思えないです。両手を上げてゴールする姿は今でも目に焼き付いています。そして、あの雄姿が、2020東京パラリンピックのお台場でも見られました。その姿については後述でレポートします。

二人目は、車いす陸上の小西恵子さんです。浦田さんと同じシーズアスリートに所属されているパラアスリートです。子供の頃に怪我で脊椎を損傷して下半身が麻痺し、車いす生活になったそうです。その現実を、どのように受け止め、乗り越えて、パラアスリートを目指すようになったのか。2019年の大阪地区会にお

いて、明るい笑顔で話されました。

パラリンピックが延期された2020年。JPSSCとして、どのように活動してよいか途方に暮れていた時、オンラインでパラアスリートにインタビューすることを思いつきました。しかし、一番ショックを受け、ダメージを被ったパラアスリートに、そのようなタイミングでインタビューして良いものか。JPSSC事務局メンバーの中でも議論はありましたが、動いてみたいと何も始まらないとの結論になり、シーズアスリートに相談したのです。そこで快く受けて頂いたのが小西さんでした。

パラリンピックの延期について、どのように受け止めておられるか、アスリート本人にお聞きするのは勇気が要りましたが、気さくに、明るく、ポジティブにお答え頂きました。「代表入りに向けて準備期間が出来た」と前向きに受け止めておられたのです。自分の置かれた状況を受け止め、常に前向きにポジティブに考える。この姿勢は、VUCAの時代に生きる私達にも求められるものです。小西さんとのオンラインインタビューを通じて、そのことを学びました。コロナ禍において厳しい局面に立たされることも多いですが、現実をしっかりと受け止めて、常にポジティブに、未来志向で考える習慣を身につけたいものです。

大変残念ながら、小西さんはパラリンピックの代表内定には入れませんでした。新国立競技場での雄姿を想像していましたが、残念ながら今年の東京大会には

出場出来ませんでした。そして、小西さんは2021年8月に選手活動の引退を表明。新たな道を歩まれる小西さんを応援したいと思います。

三人目は、視覚障がい者柔道の初瀬勇輔さん。STANDと共催させて頂いたボランティアセミナーでご講演頂いた事がきっかけで、その後も、2020年2月の東京地区会でもご講演頂きました。日本パラリンピアンズ協会の役員もされており、パラアスリートの活動を支援しながら、ご自身も競技を続けておられます。

視覚障がい者柔道は健常者の柔道とは違って組手から始まるので、よりエキサイティングで見応えのあるスポーツだと聞きました。残念ながら実際の試合を観戦出来ていないので、その迫力を生で実感していませんが、映像を拝見するだけでも、健常者の柔道よりも迫力を感じました。

初瀬さんは、19歳の時に右目の視力をほぼ失い、23歳の大学2年の時に左目の視力も失いました。人生に絶望を感じながらも、大学や家族、友人のサポートを受け、何とか卒業が見えてきた頃、知人からの勧めを受け、視覚障がい者柔道を始めたそうです。高校生の頃に、県大会で3位になるほど打ち込んだ柔道に再びチャレンジし、見えない恐怖にも打ち勝ち、最初に出場した大会で見事優勝。そこから人生が変わったそうです。国内大会では9連覇、アジア大会でも2連覇、そして遂に北京パラリンピックに出場しパラリン



大阪地区会でご講演頂いた小西恵子さん（中央）



ボランティアセミナーでご講演頂いた初瀬勇輔さん

ピアノにまで登り詰めました。

初瀬さんは仰いました、「障がい者は不便ではあるけど、出来ない事はない」と。与えられた条件の中で、制約があったら、やり方を変えて実現する。今、私達が生きるVUCAの時代にこそ大切なマインドだと思いました。

東京パラリンピックを迎えて

新型コロナウイルスの感染者数がこれまでにないペースで急増する中、パラリンピックの開催に否定的な意見も少なからずありました。パラリンピックに先立って開催されたオリンピックも緊急事態宣言下で、ほぼ無観客で開催されましたが、想像していたよりも盛り上がり、「コロナに打ち勝った」と世界からも称賛されました。出来れば、そのムードのまま続けてパラリンピックに入って欲しいと思いましたが、約二週間の準備期間があり、その間も感染拡大は続いていました。国民の心が、一時のお祭りムードから醒めて、再びコロナ禍の現実と直面し、もはやパラリンピックなんて忘れてしまうのではないかと心配しました。

しかし、NHKを中心とした報道機関はコロナ感染拡大と合わせて、連日、パラリンピックの話題を取り上げ、「パラリンピックは絶対に開催する」という覚悟が伺えました。残念ながらオリンピックと同様に無観客開催になりましたが、もはや、観客の有無よりも開催することに意味があります。もちろん、否定的な意見もあったと思いますが、パラアスリートを見てきた私たちからすると、オリンピックを中止してでもパラリンピックは開催して欲しいと思っていました。日本に、インクルーシブなレガシーを作る絶好のチャンスであり、二度と来ないチャンスですから。

遂に開会！

8月24日（金）午後8:00、2020東京パラリンピックが開会しました。開会式はオリンピックに勝るとも劣らない素晴らしいセレモニーでした。世界162の

国と地域から、パラリンピアン達が東京の新国立競技場に集まりました。NHKが、開会式開始前から最後まで中継しました。筆者もテレビにかぶり付きで、日本で本当にパラリンピックが開催出来たということを実感しました。最後に入場してきた日本選手団は、私たちJPSSCとも縁が深い浦田理恵さんが副主将を務めました。選手宣誓で浦田さんがステージの上で堂々と宣誓される姿を見て、心から誇らしく思いました。

そして、開会式で行われたパフォーマンスも素晴らしかった。片翼の飛行機を演じた少女も良かったです。義足のダンサー・大前光市さんのダンスパフォーマンスにも感動しました。2019年のJDMFでご講演頂き、交流会でパフォーマンスを披露頂いた大前さん。あの時、目の前で見たパフォーマンスが、世界中が注目する開会式でも見られたのです。事故で左足を失ったプロダンサーの大前さんは、今の自分が見せられるカッコ良さを追求し、敢えて義足を表現に取り入れています。光る義足のダンスは、パラリンピックの開会式でもひと際目立っていました。自分の持てるものを最大限に活かした「自分らしさ」が人を強くすること、それが世の中の常識さえも変える力になることを、この開会式のパフォーマンスを見て改めて感じました。

一年延期され、コロナ禍が終息しない中でしたが、2020東京パラリンピックはこうして無事に開会されたのです。

パラリンピック開催期間は13日間。筆者は、各種競技を観戦する目的で後半の9日間を夏休みにしていましたが、無観客となりテレビ観戦に切り替えました。JPSSCで観戦、応援し続けてきた競技、選手を中心にテレビの前で応援しました。

パラトライアスロン秦さんが6位入賞！

2018年に特別インタビューをさせて頂いたパラトライアスロンの秦由加子さん。8月28日（土）午前6:31に秦さんが出場するPTS2クラスがスタート。最初のスイムで、スタート直後から秦さんが先頭に立

ち、そのまま先頭で海から上がってきました。鳥肌が立ちました。凄い。一番得意なスイムでしたから、ここで先頭に立てたことは戦略通りだったと思います。

残念ながら課題のバイクで抜かれ最終的には6位。リオ大会に引き続き6位入賞です。3年前に横浜で観戦したときは、義足でバイクを漕いでいましたが、その後、片足漕ぎに変えたそうです。片足だけで20Kmを漕ぎ続けるのは超人的です。ゴールした秦さんの姿をテレビを見て、「ありがとう。やり切りましたね」と呟きました。やはり、米国の壁は厚かったけど、そこに挑む姿は格好良かった。

車いすバスケットボールの快挙！

JPSSCで何度も観戦に行き、体験会も行った車いすバスケットボール。男女共に予選リーグを勝ち残り、決勝トーナメントに進みました。特に、注目していたのが男子の鳥海連志選手。所属するパラ神奈川で実際にプレイする姿を何度か見ましたが、スピードが他の選手と全然違いました。生まれつきの障害から両脚を切断し、手の指も揃っていない身体で、あれだけ超人的なプレイをするのは信じがたい光景でした。

パラリンピック本番でも予選リーグ初戦のコロンビア戦で15得点16リバウンド10アシストのトリプルダブルを達成。オフェンスとディフェンス、ゲームメイクまで、全てトップレベルでこなす超人ぶりを見せつけられました。

決勝トーナメント初戦、準々決勝はオーストラリア戦でした。シーソーゲームの激戦でしたが、最後は日本が僅差で逃げ切りました。初めてのベスト4です。この試合でも、鳥海選手がトリプルダブルまであと1アシストという大活躍でした。初めてのベスト4で準決勝の相手は、直近の世界大会で優勝したイギリス。スピードもシュート精度も、それまでの対戦国は違うレベルで、前半はリードされる展開で終わりました。しかし、後半の日本の追い上げは神がかった。終わってみれば79対68の大差で日本が勝利。歴史的

な瞬間でした。

そして、決勝の舞台は、パラリンピック最終日のクライマックス。世界中が注目する中で、前回王者で世界一のアメリカと対決。流石に、アメリカに勝つのはハードルが高いだらうと思いながら観戦しましたが、実際は互角の勝負でした。途中、日本がリードする場面もあり、最後の1分まで勝敗が分からない程の僅差でした。

最後はアメリカの底力が勝りましたが、日本も金メダルが夢ではないと感じました。もともと、筆者はバスケットボールに興味がなく、観たことはありませんが、間違いなく、車いすバスケットボールの方が面白いと思います。今後も、国内リーグや国際大会が関東で開催されたら観戦に行きます。そして、パリ大会の金メダルに大いに期待しています。

ボッチャで初の金メダル！

バラスポーツ体験と言えばボッチャです。JPSSCでも体験しましたし、2019年のJDMFの交流会でも体験会を開催しました。そして、元日本代表の秋元妙美さんに講演もして頂きました。

今回のパラリンピックで躍動したのは杉村英孝選手。杉村選手のプレイも目の前で見たことがありますが、スギムライジングと言われる相手ボールの上に乗る技は圧巻です。そして、パラリンピックの個人戦でもスギムライジングが見られました。

日本人で個人のパラリンピックメダリストは未だに出ていませんでしたが、その歴史を杉村選手が変えてくれました。9月1日の決勝戦は前回リオ大会の金メダリスト、シンガポールのボンサー選手でした。緊張感溢れる試合でしたが、4対0の大差をつけて杉村選手が勝利。日本選手としてボッチャで初の金メダルです。

テレビの前で共に戦ったゴールボール！

何と言っても、最も力を入れて応援したのがゴールボール女子です。全ての試合をリアルタイムで観戦しました。予選の2試合は業務中でしたが、オンライン会議をしながら、傍らでLIVE動画を見ていました。

予選の初戦がいきなり金メダル最有力のトルコ戦でした。一昨年、幕張で開催された国際戦を観戦に行った時、トルコとの試合も見ましたが、日本は明らかに体力的に不利でした。そんなトルコと初戦で当たるのは厳しいと思いましたが、心配が的中し結果は大敗でした。でも、予選リーグなので想定内の結果です。

2戦目も強豪ブラジルです。浦田さんも先発で出場し、前半が終了した時点で4対0で勝っていました。これは行けると思いましたが、後半、ブラジルに追い上げられ、終わってみたら4対4の引き分け。勝てる試合を引き分けに持ち込まれ、少し嫌なムードになりました。それでも、浦田さんはインタビューで諦めていませんでした。「悔しさは残るけど、切り替えます」と言っていました。

その言葉の通り、第3戦のアメリカ戦は3対2の僅差で初勝利。前回リオ大会で銅メダルであったアメリカに勝ったというのは大きかったです。これで決勝トーナメントが見えてきました。予選最終戦はエジプト。世界ランクも低く、他の国と比べて実力差が明らかでした。結果は、10対0のコールド勝ちでした。

決勝トーナメントの初戦は強豪イスラエル。前回、リオ大会では決勝トーナメント初戦で敗れましたので、何としても今回は突破したい。センターで司令塔の浦田さんは落ち着いていました。鉄壁の守備を見せて相手を1点に抑えこみ、若手エースの萩原選手が4ゴール。テレビの前でガッツポーズをしました。ロンドン大会以来のベスト4です。

そして、準決勝は最大の難関、トルコでした。初戦の完敗をリベンジして欲しいと思って観戦に臨みまし

た。いきなり日本が2点を先取し、日本ペースの試合展開になりました。しかし、トルコの高いバウンドボールに苦戦しました。後半の終盤までシーソーゲームが続き、目が離せない試合展開になりましたが、最後はトルコが底力を見せて5対8で負けてしまいました。日本は善戦でした。あと一步で、最強トルコに勝てた。負けたことは悔しいですが、日本の頑張りに拍手をしました。

そして、銅メダルを掛けた3位決定戦は、予選リーグで引き分けたブラジル。少し、嫌な相手でしたが、予選の時の日本チームとは違い、本大会の中で進化していました。前半で5対0と大きくリード。後半のブラジルの追い上げを固いディフェンスで1点に抑え、残り2分の場面で浦田さんがコートに入り、最後のゲームメイクをしました。結果は、6対1で見事に日本が勝利。銅メダルを獲得しました。リオ大会では5位でしたので、2大会ぶりのメダル獲得です。

感動しました。浦田さんの5年間の努力をずっと見てきたので、自分事のように感動しました。日本中の人に、ゴールボールの魅力が伝わったと思います。20歳で代表に入った萩原選手の大活躍も嬉しかったです。44歳の浦田さんと、20代の若い選手たちが家族のようなチームワークを見せていました。2017年、JDMFの講演で浦田さんが話された「世界に誇れるチームワーク」を実感できました。「感動をありがとう」、試合直後に浦田さんにメールしました。

前大会の倍以上のメダルを獲得！

前大会のリオパラリンピックで日本が獲得したメダル数は合計24個で64位でした。そして残念ながら金メダルはありませんでした。自国開催では更なるメダル獲得が期待されましたが、日本のパラリンピアン達はその期待に大いに応えてくれました。

東京パラリンピックにおける日本のメダル獲得数は51個で世界11位。前大会の倍以上のメダル数です。

しかも金メダルも13個獲得しました。日本のパラスポーツがこの5年間で大きく成長した証です。パラスポーツの競技環境が充実し、競技人口も増え、すそ野が広がったのだと思います。

JISA会員の皆さんも、パラリンピック開催期間中のテレビやネットで、連日のようにメダル獲得の

ニュースを目にしたと思います。ニュースを見てオリンピックと同じように一喜一憂したかも知れませんが、オリンピックとは比べ物にならない程、大きな出来事だったのです。日本という国が変わり始めていることを目の当たりにしたのです。次ページに、東京パラリンピックにおける全競技の結果をまとめましたので、あらためて今大会の成果を感じて欲しいです。

2020東京パラリンピックの全競技の結果



日本のメダル獲得数



13



15



23

競技	メダル獲得数 国別順位	日本人選手	日本人メダル獲得
アーチェリー	1位:中国、2位:チェコ、3位:イラン	6人	残念ながらメダルは無し
カヌー	1位:イギリス、2位:オーストラリア、3位:ウクライナ	6人	残念ながらメダルは無し
競泳	1位:中国、2位:RPC、3位:アメリカ	27人	鈴木孝幸選手の5つのメダルを含む 13個のメダルを獲得
車いすテニス	1位:オランダ、2位:日本、3位:オーストラリア	10人	国枝慎吾選手の金メダル、上地結衣選手の銀メダルを含む4つのメダルを獲得
車いすバスケットボール	1位:アメリカ、2位:オランダ、3位:日本	24人	男子が奇跡の銀メダル獲得!
車いすフェンシング	1位:中国、2位:RPC、3位:イギリス	6人	残念ながらメダルは無し
車いすラグビー	1位:イギリス、2位:アメリカ、3位:日本	12人	日本が 銅メダル獲得
ゴールボール	1位:トルコ、2位:ブラジル、3位:アメリカ	12人	浦田さん率いる女子チームが銅メダル獲得
シットイングバレーボール	1位:アメリカ、2位:イラン、3位:中国	21人	残念ながらメダルは無し
自転車	1位:イギリス、2位:オランダ、3位:フランス	4人	杉浦佳子選手が 2つの金メダルを獲得
射撃	1位:中国、2位:セルビア、3位:インド	3人	残念ながらメダルは無し
柔道	1位:アゼルバイジャン、2位:ウズベキスタン、3位:イラン	13人	2個の銅メダルを獲得
卓球	1位:中国、2位:オーストラリア、3位:フランス	11人	伊藤瑠紀選手が 銅メダルを獲得
テコンドー	1位:ブラジル、2位:イラン、3位:ウズベキスタン	3人	残念ながらメダルは無し
トライアスロン	1位:アメリカ、2位:スペイン、3位:イギリス	9人	男子で 2つのメダル獲得 秦選手は6位入賞
馬術	1位:イギリス、2位:オランダ、3位:ベルギー	4人	残念ながらメダルは無し
バドミントン	1位:中国、2位:日本、3位:インドネシア	13人	3つの金を含む9個のメダルを獲得
パワーリフティング	1位:中国、2位:ナイジェリア、3位:ヨルダン	4人	残念ながらメダルは無し
ブラインドサッカー	1位:ブラジル、2位:アルゼンチン、3位:モロッコ	10人	残念ながらメダルは無し
ボート	1位:イギリス、2位:ウクライナ、3位:ノルウェー	6人	残念ながらメダルは無し
ボッチャ	1位:スロバキア、2位:タイ、3位:日本	15人	杉村英孝選手の金を含め3つのメダルを獲得
陸上	1位:中国、2位:RPC、3位:アメリカ	59人	3つの金を含む12個のメダルを獲得

活動を通して得たこと情報サービス産業への提言

「JISA革命プロジェクト」としてスタートした「パラスポーツ支援コミュニティ」ですが、この活動を通して情報サービス産業に革新をもたらしたかと問われると、正直言って、自信を持ってYESとは言えません。目標としていた会員2,000人の巻き込みが達成出来なかったことから、そのように総括せざるを得ないと思っています。ただし、活動してきたことに意味が無かったとは思っていません。そして、更に意味あるものにするために、この総括レポートを書いています。

JISA理事会で何度かお時間を頂いてJPSSCの活動報告を致しましたが、その都度、多くの理事の皆様から激励のお言葉を頂きました。それは、JPSSCのメンバーが完全にボランティアに社会課題の解決に取り組んでいることに対する激励だと感じました。そのこと自体は大変ありがたく、やりがいに繋がるものであったと思います。しかしながら、JPSSCはパラスポーツを盛り上げるボランティア活動ではありません。社会課題の解決に自発的にコミットするマインドを情報サービス産業界に広げることが「JISA革命プロジェクト」としての最大の目的でした。と言っても、昨今、声高に求められているESGやSDGsにコミットしようという事ではありません。もちろん、それらも重要な事ですが、それ以上に、情報サービス産業界が裏方産業から脱却して、表舞台で社会やビジネスをリードする産業になることが重要なのです。

SIは建築に似ていると言われています。要求された仕様を確実に実装し、品質高く、工期通りに納める。対象の規模が大きくなると、多くのコントラクターを巻き込み、大規模なプロジェクトマネジメントも必要になります。それを専門に行うゼネコンのような存在が必要になります。SIは、まさにこの構造に似ているのです。それを示すように、1990年代にはSI企業が挙ってISO9000を取得しました。つまり、SIとは大規模なモノづくりだったのです。

今はどうでしょう。ICTに求められていることは、家づくりでも、ビル建設でもなく、街づくりではないでしょうか。どのような街を作りたいか、ビジネスサイドにも答えがありません。何故なら、正解がなく、やってみないと分からないから。だから、仮説検証型になるのです。そして、仮説検証を進めるためにはテクノロジーが欠かせませんので、ICTとビジネスのパートナーシップが必要なのです。つまり、ICTは要求された仕様を実装するだけのSI専門集団ではなく、パートナーとしてビジネスと共にお客様のニーズの掘り起こしや、社会課題の解決をしなければならないのです。

Uberしかり、Airbnbしかり、Netflixしかり、デジタルディスラプターと呼ばれるスタートアップたちは何れも、人々が求めている潜在的なニーズや、社会課題の解決を目的に立ち上がった企業です。ビジネス×テクノロジーで社会課題を解決し、それが既存のマーケットを変えているのです。

今、ビジネス部門は必死になってテクノロジーを学んでいます。このまま、ビジネス部門が自らの懐にテクノロジーを納めたらどうなるでしょう。ICT部門は必要なくなり、SI企業も必要なくなります。もちろん、既存ビジネスを支えるレガシーシステムは当面なくならないでしょうから、ICT部門やSI企業がすぐに必要なくなることはないでしょう。でも、このままではSI企業の10年後を想像出来ません。だからこそ、SI企業は、もっと社会課題に目を向けて、表舞台に出ていくべきだと思うのです。

そして、今の若者は、そのことに気付いています。ICTは社会課題の解決のためにある。社会貢献の手段としてICTがある。そう思っている若者が増えていると思います。筆者は、自社で人事も担当しており新卒採用で学生と接する機会が多いですが、少なくとも当社にエントリーする学生の多くが、社会課題の解決や社会貢献を目指して就職しようとしています。つまり、将来を担う優秀な若手エンジニアを集めようと思った

ら、SI企業であっても社会課題へのコミットが必要だという事なのです。

ポストJPSSC JISAとしてのレガシーへの貢献

オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であると同時に、開催国におけるレガシー構築の意味も持っています。今回のオリンピック・パラリンピックは新型コロナウイルスのパンデミック禍で開催された特殊な大会になりましたので、新型コロナウイルスを克服したアフターコロナの世界がレガシーになるのかも知れませんが、一方で、パラリンピックについては、本来はD&Iを社会に根付かせることがレガシーです。コロナウィルス克服ばかりに注目が集まり、そのことが置き去りになってはならないと思います。

私達は、JPSSCの活動を通じて、障がいの有無に関するD&Iについて多くを学びました。パラトライアスロンの秦さんは日常でも義足を隠さずに生活していると、インタビューの中で伺いました。海外に遠征した時、珍しがって義足を見ている子供たちに対して親が言ったそうです。「かっこいいね。このお姉さんは、事故か病気で足を無くして、義足を付けているのよ」と。日本でも同じような状況に遭った時、日本人の親は「ごめんなさい」と言って子どもに見ないように促したらしいです。この話を伺ったとき、すごくショックを受けました。何故なら、自分も目を背けてしまいそうだったからです。自分の中にも障がい者に対するインクルーシブなマインドが無いと言うことに気付いたのです。

パラサポの協力を得て開催した特別イベントにおいて、パワーリフティングの山本恵理さんのセミナーを受けた時も多くの学びがありました。普段は、聞かなくても聞けない素朴な疑問を、ハンディキャップを持たれた本人に直接聞く機会は非常に貴重でした。このセミナーはパラサポが展開するセミナーなので、内容については書けませんが、一つだけ、最も心に残って

いる山本さんの言葉をお伝えすると、「健常者と同じように、普通に接して欲しい」という事でした。手助けが必要な時は、その旨を伝えるので、健常者と変わりなく接して欲しいと言うのです。どのように接して良いか分からないので目を背け、関りを避けてしまうことが、インクルーシブの阻害要因なのです。

ゴールボール浦田理恵さんの場合は、講演頂いた後や、試合を観戦に行った時に携帯メールをお送りすると、すぐに返信が来ます。漢字も使った普通のメールが返ってくるのです。最初はメールをお送りすることに躊躇しました。視覚障がいの人にメールを送るのは非常識ではないかと思ったのです。かなり逡巡した後、勇気を出してメールを送ったら、普通に返信があり、驚いたことを今でもはっきりと憶えています。後に、浦田さんにお会いした時にメールについて伺ったら、受信メールについては音声機能を使って耳で聞き、自分から送る時はガラ携を使ってブラインドタッチで文章を打っていると仰っていました。

私には想像もつかないことでした。視覚障がい者柔道の初瀬さんが、僅かな視野の中でスマホを使いこなしている姿を拝見したこともあります。パラリンピアンのお二人は特別なかも知れませんが、視覚障がいの人とはメールのやり取りが出来ないと思うのは非常識だという事を知りました。

JPSSCの活動に参加してくれた会員の皆さんが、JPSSCの活動や、JPSSCが発信した情報を通じて、インクルーシブマインドを少しでも意識するようになって頂けたら嬉しいです。そして、日本で開催されたパラリンピックを観戦することで、多くの日本人が障がい者に対するバイアスを取り除き、インクルーシブの意識が芽生えたことを期待しています。

JPSSCの活動はクローズしますが、D&Iが根付いた社会というレガシーを作ることにJISAとして引き続き貢献していくことが重要だと考えています。これまでも力を入れてきた障がい者雇用という観点も重要

だと思っています。また、パラアスリートを雇用することや、支援することに力を入れている会員企業も増えていきますので、この動きを一過性のものにしないよう、引き続き、JISAとしても様々な場面で取り上げていきたいです。

もちろん、自社だけでパラアスリートを雇用することや、個別に支援することはハードルが高いと思います。そこで、シーズアスリートのようなパラアスリートを支援する組織や障がい者スポーツ協会などの会員になることも一つの選択肢です。法人会員になり会社としてパラアスリートを支援することにコミットすることは社員の意識を大きく変えると思います。法人会員になることが難しいようであれば個人で会員になることも可能です。どのような制約があるかわかりませんが、JISAが会員になることもレガシーへの貢献の観点で意味があると思います。

パラリンピックの22競技団体に対して、共同オフィスと競技団体運営のサービスを提供するパラサポ。日本財団ビルの1フロアを提供していますが、当初、この支援の期限が2021年度までと聞いていましたが、活動継続されると伺い、安心しました。しかしな

がら、新型コロナウイルスの影響によりスポンサーの継続が出来なくなるなど、パラ競技団体の運営は再び厳しくなることが予想されます。メジャー競技の競技団体は自力で運営することが可能でしょうけど、競技人口が少ない小さな競技団体は依然として厳しい運営環境が続く可能性があり、そんな時こそ企業ができるサポートは様々あると思います。例えば、団体運営に関するICT環境についても、JISAがD&I活動の一環としてこれをサポートすることも考えられると思います。

日本は先進国の中でD&Iが圧倒的に遅れている国です。これは恥ずべきことだと思います。JISAは進んでこの課題解決に向き合うべきだと思います。最新テクノロジーに最も近いJISAが動けば世の中が変わります。障がいの有無だけでなく、ジェンダーや国籍、世代など、D&Iには様々な要素がありますので、どれか一つでも良いので、国の恥ともいえるD&Iの遅れに対してJISAが向き合って、コミットすべきだと思います。そんな会員企業が1社でも多く出て来ることを期待しています。それがJPSSCの目指したJISAの革命です。(完)



2017年6月21日キックオフミーティングで活動に向けた思いを表明

JPSSC事務局メンバーのコメント



JPSSC座長
東京海上日動システムズ株式会社
小林 賢也

5年前、「パラリンピックを盛り上げるプロジェクトをJISAで立ち上げたい」との相談を受けた時、すぐには状況が呑み込めませんでした。何故、パラリンピックなのか。腹落ちはしないけど、動いてみたら何か見えて来るかも知れないと思い、座長をお引き受けしました。2016年の初年度は立ち上げ準備期間でしたが、同期間中に様々な組織、団体、人と出会い、話を伺う中で、JISAがこの課題に取り組むべき理由が分かりました。

日本はバラスポーツの認知度が極めて低く、D&Iの意識も先進国の中で圧倒的に低い。そんな国でパラリンピックが開催出来るのか。それが、世界から見た日本の現状であることを知り、ショックを受けました。この社会課題は国を挙げて解決すべき課題であり、情報サービス産業界もそれを支持し、支援することをコミットすべきだと思いました。そして、そのことは、請負の精神が染みついている情報サービス産業界のマインドを変えるきっかけに出来たと思ったのです。それがJPSSCをスタートさせた理由でした。

一方、この思いをJISA会員の中に広げることが容易でない事は理解していました。約半年間、一緒に活動してきた準備メンバーの中であっても、この思いに賛同して頂けたのは半数でしたから、これを広く会員に広げるのは極めて困難だと認識していました。それでも、やり続けようと思いました。たとえ一人になっても、理事会や事務局から「止めろ」と言われるまでやろうと思いました。そして、パラリンピックを見届けるところまでやり切ることが出来ました。ここまで、心折れずにやってこられたのは、一緒に活動してくれた人たち、応援してくれた人たちのお陰です。

立ち上げ準備時から最後まで、ずっと一緒に活動してくれたリンクレアの菅野さんには心から感謝しています。一緒に、ICTで日本を変えることが出来る仲間だと思っています。そして、後半から事務局として参加頂いたリンクレアの部田さんにも活動にコミット頂き、積極的に動いて頂きました。また、JISAの会員ではないにもかかわらず、JPSSCの主旨に賛同頂き、立ち上げ時から事務局として一緒に活動頂いた元インフォテックサービスの千葉さんにも感謝しています。一緒にグローバルやボッチャの観戦に行ったことを思い出します。ご本人がパラアスリートでもある千葉さんの思いの熱さがJPSSCの活動を引っ張る原動力になっていたと思っています。

JPSSCの活動をずっと支援、リード頂いた、溝尾さんを始めとするJISA事務局の皆様。素晴らしい組織だと思います。単なる事務局ではなく、本気で日本を変えよう、JISAに革命を起こそうと思っていることが伝わってきました。JISAという組織の強さを感じました。「ありがとうございました」という言葉では表現しきれない程、感謝しております。そして、理事の皆さんの中にも、本気で応援頂いた方が何人もいらっしゃいました。こんなに魅力的なICT企業があるのだと、改めて実感しました。

JISAに革命を起こす程の影響を与えられなかったかも知れませんが、コロナの影響を受けながらも、志を持ってやり抜くことが出来ました。個人的には満足です。そして、これからも個人としてD&Iの実現に向けて貢献していきたいと思っています。ありがとうございました。



JPSSC事務局メンバー
リンクレア株式会社
菅野 良太

長かったようで、短かったJPSSCも東京パラリンピックに合わせて終わりを迎えます。初期メンバーとしてこれまで走ってこられたことに感謝いたします。私の人生に大きな影響を与える活動でした。

5年間、本当に出会いと学びの日々でした。小林座長をはじめ、千葉さん、JISA事務局の方々、協力してくれる仲間たち。みんながパラスポーツと向き合い、何ができるのかを真剣に悩んで取り組んだ日々は、面白さもあり、苦労もあり、本当に楽しかった。ありがとうございました。

この活動の中で、様々な障害を持った方々とお話をさせていただきました。最初の頃は、妙に気を使ったり、聞いてはいけないことなど気にしたり、、、。ですが、皆さん本当に魅力的な方々ばかりで、可愛らしい方、面白い方、力強い方、カッコいい方、だんだん会うのが楽しみになっていきました。

「普通とは何か」「当たり前とは何か」こんな問いをたくさん投げかけられました。考えれば考えるほど何が普通で何が当たり前なのかわからなく

なると同時に与えられたものを最大限に活かすことが大事だということに気づかされます。東京パラリンピックで魅せてくれた超人的プレーは、それを証明してくれました。

残念ながら東京パラリンピックはリアルな観戦はできませんでしたが、多くのメディアが毎晩パラリンピックの特集を組み、選手を紹介していました。初めて見るサポート器具やパラスポーツならではの競技があることにびっくりしました。目が悪く生活に不自由だったのが、「眼鏡」の存在によって、普通に生活できるようになったように社会の成熟や技術の発展が「障害」を「普通・当たり前」に変えることができるのです。パラアスリートのファンが増えることで、成熟や発展が加速することを祈っております。

悩みながらの5年間でしたが、パラリンピックを勉強し、パラスポーツを体験し、イベントを通じて多くの人に共感してもらえる活動ができたのではないかと思います。これからも私は、パラスポーツの一ファンとして応援していきたいと思います。JISAのプロジェクトに参画させて頂き、本当にありがとうございました。



JPSSC事務局メンバー
元 インフォテック・サービス株式会社
千葉 正弘

パラリンピック競技に出場していた選手たちは、長い年月にわたり鍛錬して培ってきた力を、国の代表としてこの一瞬に出し切ったと思います。メダルの色やメダルの有無を問わず、みんな輝いて

いるように見えました。ゴール後に競い合った選手たちが、抱き合い、手を取り合ってたたえあっている光景も清々しかった。表彰式も良かったな。競技直後のインタビューも感動的でした。結果を

問わず前向きなコメントが多かった。オリンピックでは泣きませんでした、パラリンピックでは泣いた。

自国開催だからでしょうが、放送でも特別に時間を割り当てていました。特にNHKでは開催前からパラリンピックの特集を組み、パラリンピック期間中は終日、競技の中継や録画を流していました。ほとんどオリンピックと同じ扱いでした。競技終了後にはテレビの視聴者から「感動した」「元気をもらった」「勇気をもらった」などの感想がたくさん寄せられていました。「初めて競技を見た」といったコメントも多く見かけ、パラ競技の理解も進んだように感じました。水泳では選手の障害の部位が晒され、視聴者はさまざまな障害があることを知って驚いた方も多かったのではないのでしょうか。

障がい者である私は右上肢を切断していますが、



JPSSC事務局メンバー
リンクレア株式会社
部田 裕介

東京パラリンピックが無事に開催され、大いに盛り上がり、感動をいただきました。細かなクラス分けや、通常とは違う競技ルールなど知らないことも多かったのですが、純粋に競技を楽しみました。特に車椅子バスケットは、会社メンバーとLINEでチャットしながら、応援しておりました。決勝戦、途中までリードしていたのですが、残念です。

こんな私ですが、今まで「パラスポーツ」というものをほとんど見たことがありませんでした。パラスポーツは自分には遠すぎて関係のない競技だと思っていましたし、テレビでほとんど放映されなかったというのもあると思います。それが今回、自ら興味を持ってパラリンピックを観戦出来たのはJPSSCという活動に参加したからです。

四肢に障害があるような方には出会ったことがありません。「そんな体でも泳げるのか!」と驚かされました。私の一番の不安は健常である左手が使えなくなることです。仮にそうであっても、不便だろうけど、なんとかかなりそうです。パラリンピックを終えた選手たちは、日常生活に戻って行きます。競技場で輝いていたように、日常生活でも輝くことを祈ります。本人が努力することはもちろんですが、感動をもらった人たちがどのように障がい者に接するのか、感動を行動に換えてほしいと思います。

最後に、座長の決して挫けない心意気、覚悟のもと、気の置けない仲間と仕事ができ、感謝しています。ありがとうございました。自分の人生で二度とないであろう自国開催の東京パラリンピックに関わるプロジェクトに参画できたことを誇りに思います。

私がJPSSCに参加したのは2019年で、同じ会社の菅野に誘われて、なんとなく、、、、そう、本当になんとか参加しました。当初は大きな興味も無かったというのが正直な所です。ですが、参加してみてJPSSCメンバーの想い、それを形にする実行力、熱量に感化され、徐々に興味が湧いてきました。(ゴールボールのルールを知ったのもこの頃です)個人的にはJISAをあまり意識せずに活動できたのが良かったかなと思っています。

2020年からはメンバーと直接お会いすることが難しくなり、オンラインで工夫しながら活動を進めてきました。ある時、パラスポーツ関係者とオンライン対談の機会をいただいたのですが、その時に聞いた言葉が印象に残ってます。それは「障

がい者は普段から不便に慣れているので、コロナ禍の制限は1つ不便が増えたくらいだ」という言葉です。ポジティブな考えで力強いなと思うと同時に、まだまだ日本では障がい者が不便と感じる国なのだと再認識しました。

その対談後に開催された東京パラリンピックで、国民のD&Iの意識が高まったと思います。この東京パラリンピックの熱量を今回で終わりにするので

一般社団法人情報サービス産業協会
パラスポーツ支援コミュニティ事務局
溝尾 元洋

パラスポーツ支援活動の事務局を2016年から担当させていただきました。受託開発型ビジネスから価値提供型への転換が進む時期に、JISAが情報サービス産業としてICTやソフトウェアの力も使って、社会課題を解決をするひとつの入り口になったと考えています。

当初は、ICTを活用しながらどのようにして業界内にパラスポーツのファンを増やすか、「ICT」と「人」の力でパラスポーツ振興を支援し、『パラスポーツを知ろう！見よう！応援しよう！』のムーブメントを起こし広めていくか、悩ましいこともありましたが、イベントを開始すると多くのJISA会員企業の皆様から積極的にご参加をいただき、ICTで社会に貢献したいという皆様の思いを感じてきました。当時、パラスポーツを盛り上げるためのアイデアソンをしたとき「参加型広告と電車広告」「有名人と一緒にVR観戦」「感情揺さぶるポータル」等意見が出ましたが、正解がないなか、社会課題解決に向けてJISA会員企業の個人が共創した有意義なイベントで、ビジネスにおいても、様々な価値観の集まりで自ら意見を出す機会になったと考えております。

はなく、障がい者の皆さんが気兼ねなく思いを表現できる、そんな社会の変化を起こしていけたらよいなと思ってます。

最後に、小林座長はじめ、JPSSCの皆様には大変感謝しております。皆様のおかげで、このような体験をさせて頂き、視野を広げることができました。ありがとうございました。

活動が軌道に乗り始め、複数のパラスポーツの競技団体様、関係者様にサポートをいただき、ボランティアセミナー、パラスポーツ体験会、講演会等、ご協力いただきました。パラスポーツ支援に貢献したいという思いではじめましたが、既存の枠にとらわれず、異業種とコラボレーションし、同じ課題に取り組めたことは今後の業界活動にとって大きな原動力となるものであります。

個人的には、JPSSCでの活動もきっかけで、日本財団パラリンピックサポートセンターが主催するパラサポ応援隊に参加いたしました。担当はバドミントン。活動は完全オンラインでSlack、Zoom等を駆使して情報交換をしながらSNSで盛り上げる企画を遂行。このような活動はまさにICTを活用した社会貢献活動で、情報サービス産業が活躍する場であり、これからの日本にとっても重要だと感じました。(パラサポ応援隊の活動はパラリンピック以降も継続中)

最後に、JPSSCの活動に関わっていただいた皆様ありがとうございました。本活動がよいレガシーとなりSDGsに貢献する今後の協会活動に繋がれば幸いです。